

私が今日紹介する記事は、日経エレクトロニクスの「耳の中にコンピューター」という特集の一部であるこの記事です。タイトルは、「耳に”秘書”が住み込み、同時通訳から決済までこなす」となっており、耳に装着する超小型コンピューターの「ヒアラブル端末」の歴史や様々な機能について書かれていました。

まず、ヒアラブル端末について紹介します。ヒアラブル端末とは、耳に装着する超小型コンピューターのこと、ワイヤレスイヤホンや補聴器などのことを指します。そのヒアラブル端末の中でも、特に脚光を浴びているのが、「完全ワイヤレスステレオ (TWS) イヤホン」と呼ばれる左右のスピーカーをつなぐコードさえもなくした製品です。TWS イヤホンの歴史は、事実1年半ほどで、近年市場が急激に成長している製品です。これの背景には、iphone 7 からイヤホン用のミニジャックが除去されたことなどが挙げられます。

このようなことから人々のヒアラブル端末に対する関心は高くなっており、ワイヤレスヘッドホンなどを含むヒアラブル端末製品全体の市場は約5億円弱になると予測されています。

記事3 ページ目の下の部分を見ると、「音楽再生機能がない製品も」とあります。この部分の記事を少し追っていきます。

世界の各社は、TWS イヤホンを単なる音楽再生用のワイヤレスイヤホンとしてだけでなく、発展性が高いイヤホン型小型コンピューターであると考えています。そう位置付けるのは日本のメーカーだけでなく、すでに音楽再生機能が主目的でなかったり、その機能がない製品も登場している。2017年9月に英語圏で出荷予定のPilotの主な機能として、多言語の同時通訳機能を挙げる。Pilotを装着した人同士であれば、互いに異なる言語で話していても、耳には翻訳された言葉が聞こえてくるという。また、外部の騒音を遮断する機能に特化した“電子耳栓”や、音楽再生以外の多くの機能を実装可能な耳飾り型コンピューターなども試作されています。

このように、ヒアラブル端末の用途はさらに広がる見通しで、将来的には、ヒアラブル端末が、利用者がいる場所や何をしているかを詳細に把握して適切な情報を音声で伝えてくれる秘書や執事のような存在になるかもしれません。

また、ヒアラブル端末の用途は、AR グラスやVR ゴーグルのようなウェアラブル端末と一部重なる部分があります。多くのウェアラブル端末の中でも、ヒアラブル端末は、その応用性の高さ、装着時の体への負荷の軽さ、社会的抵抗感の低さなどの特徴を持っており、(画像6) ウェアラブル端末の本命になると予想されています。

私はこの記事を読んで、「近い将来、ヒアラブル端末のおかげで言葉の壁がなくなり世界中どんな人でもコミュニケーションが取れる世界になる日が来るのかもしれないな」と思いました。2020年の東京オリンピックが開催されると、世界中の人々が日本に集まることになり、コミュニケーションをとるのが困難な場面も多くなると思います。そんな時、

ヒアブル端末が自動で翻訳を行ってくれるとコミュニケーションを非常に簡単取れるようになるため、非常に便利だなと思いました。